

## 四旬節第 5 主日 (ヨハネ 12:20-33)

父よ、わたしをこの時から救ってください



3月17日、中田神父の叙階記念日を迎えました。島本要大司教様に叙階の秘跡を授けていただきました。これから32年目に入ります。特別な思いはありませんが、だんだん頑固になってきている気がしますので、頑なな心を砕いてもらいながら務めたいと思います。

イエスはご自身の苦しみをほとんど表に出しません、今週の朗読箇所12章27節はそれを言葉にしています「父よ、わたしをこの時から救ってください」。苦しみを打ち明けている箇所をあと一つ思い出しました。マルコ14章35節でイエスは地面にひれ伏し、「できることなら、この苦しみの時が自分から過ぎ去るように」と祈っています。(次の箇所も参考として。ルカ22章44節)

苦しさの極みにありながら、御父の望みに従います。「今、わたしは心騒ぐ。何と言おうか。『父よ、わたしをこの時から救ってください』と言おうか。しかし、わたしはまさにこの時のために来たのだ。父よ、御名の栄光を現してください。」(12・27-28) 避けて通れるものならそうしたい。けれども、一粒の麦として、死んで多くの実を結ぶことが、御名の栄光を表す道なのです。

「地に落ちて死ななければ一粒のままである。」(12・24) 私はこの部分に特に目が留まりました。「地に落ちる」という表現は日本語では評判や権威が失墜することです。この箇所にそこまでの意味は含まれていないでしょうが、「地に落ちて」死ななければ一粒のままであると考えるなら、私たちにもっと強く訴えかけてくるのではないのでしょうか。

この感覚を保って、読み続けます。「自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む人は、それを保って永遠の命に至る。」(12・25) 自分の思い描く最期にこだわるなら、それは「地に落ちて死ぬ」ということではありません。もしかしたら捨てられて、そばにいてほしい人もいないまま最期を迎えるかもしれない。そんな「地に落ちて死ぬ」ところまで受け入れるとき、この世の命を神に保ってもらい、永遠の命に至ることができるのです。

それは、今の中田神父には全く受け入れられない最期です。3月12日で58歳になって、司祭生活も確実に折り返したので、もしも余命を宣告されても受けとめるでしょう。しかし、苦楽を共にした人や、実家の家族や、そばにいてほしい人がいなくて旅立つのは耐えられません。

「地に落ちて」の死は耐えられないのです。

すると、さらに続く箇所も踏み込んで考えることができます。「わたしに仕えようとする者は、わたしに従え。」(12・26) イエスに全面的にお仕えしたいと考えていました。それなのに、「地に落ちて」死ぬところまでは従えません。「どんなことでも従います」と決心していたのに、すぐに手のひらを返してしまいます。

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

イエスは「地に落ちて」死ななければならないのに、私は「地に落ちて」は死ねないというのでしょうか。来週の受難の一週間に向けて、本当に私はイエスのいるところに留まりたいのか、自分が留まりたいところにだけ留まろうとしているのではないか。思い巡らしましょう。

受難の主日(マルコ 15:1-39)

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。